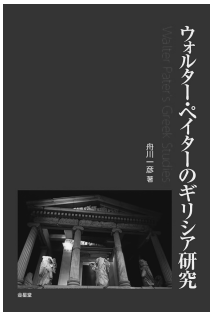
書　評



舟川一彦著『ウォルター・ペイターのギリシア研究』
（金星堂、2023年）

松村　伸一（青山学院大学）

小さな大著、とでも呼ぼうか。包みから本書を取り出した第一印象は、小さい、だった。通常の四六版で170頁以上はあるので、いささか不当な第一印象だが、著者の先著『十九世紀オクスフォード』（2000年、以下『十九世紀』とする）や『英文科の教養と無秩序』（2012年）とつい比較していたせいか、まずそう感じたことははっきり憶えている。それから通例通り目次と巻末資料に目を通したあたりで風向きが変わる。注を含めて約40頁、充実した索引、豊富な引用文献表。これだけでも襟を正すに値するところだが、これまた通例通りに付箋を脇に頁を繰りはじめて唖然とした。気づけば、教科書全文を蛍光ペンで塗りつぶす高校生よろしく、一頁に一枚は付箋を貼っていたからである。その後は、これはもう再読三読するほかないと諦めた（この短文のために読み直して付箋は増えたが）。幸い再読が苦にならない長さであり、三読味読に値する内容でもある。会員諸賢の中には（著者ご自身を含め）、瑣末事を芝居じみた言い草で、と眉を寄せる向きもあるかもしれないが、実際にすでに本書を手に取られた方々であれば、多かれ少なかれ同様の経過を辿られたのではあるまいか。

本書は二〇一五年、二〇年、二三年に著者が行った学会発表が元となっている。これはおおむね、ステファノー・エヴァンジェリスタやレーネ・エスターマーク＝ヨハンセンらが、古典研究と彫刻論に焦点を当てつつ、精力的に新しいペイター論を発表した時期に相当する。二〇一九年にはオクスフォード大学出版局から新しいペイター全集が刊行され始め、既刊は『想像の肖像画』『ガストン・ド・ラトゥール』『古典研究』『書簡集』で、うち『書簡集』は本書と同年の出版である。こうした新しい成果と自然体で

向き合いつつ、長年の研究から得た独自の知見を踏まえて仕上げられたのが本書である。

タイトルからはニッチなモノグラフと見られかねないが、本書のスコープは広い。大著と呼ぶ所以である。第一章「オクスフォードのペイター――プラトン論と大学教育の問題」は、ある程度までは『十九世紀』の補遺と見ることができるかもしれない。氏の博士論文に基づく同書は、この時代にオクスフォード大学内部で進められた世俗化に向かう機構改革と古典教育改革を、学内政治や学外の知的環境と絡めつつ丁寧に追っており、広くヴィクトリア朝期の知的エトスに関心ある者の必読書となって久しい。とはいえ、たとえば「優等学位コース（Honours School）」の「第二等級（Second Class）」とか、「学生指導担当者（Tutor）」、「講師（Lecturer）」といった用語を、単なる訳語としてではなく、その実質的な意味を知りたいであるとか、あるいはどんな教育や試験がどんな価値判断、人間観に基づいて行われていたかを知る手がかりを得たいという場合、とりあえず本書第一章が役立つことだろう。たとえば、私たちが現在テュートリアルという語から連想する、学生が教師の私室を訪れて個人指導を受ける授業形態は、その名詞用法とともに第一次大戦後に発生したものであることは、本書でも指摘されている。ただし、テューターの伝統的な意味のほうは『十九世紀』を参照する必要がある。

補遺の域を超えていると思われるのは、ウォルター・ペイターという、大学組織の末端に位置する、あるいは望まずしてはぐれ者となってしまった、一構成員を狂言回しとして、複眼的に大学の機構改革、教育改革を見直している点である（望まずして、というところが重要で、著者も繰り返し指摘する通り、ペイター自身は大学という組織との和解を最後まで望んでいた）。『十九世紀』でも教育改革の二本柱として詳説されていた、試験規程への「近代著作家による古典の例解」という方法の導入、そしてアリストテレスに代わってプラトン、とりわけ『国家』を特権的なテクストとして扱う教材面の変革は、ペイターというフィルターを通して肉付けされる。『ルネサンス』の「結語」が、ヘラクレイトスの断片をエピグラフに置き、「この人生哲学を『近代思想の趨勢』の必然的帰結として」フィヒテにカント、バークリーにスペンサーといった近代哲学者を参照枠としながら論を展開

しているのは、「まさに〈古典をだしにして近代思想を語る〉『例解』の慣習の実践という様相を呈」しているとの指摘は、舟川ならではのものであろう（19-20）。また、一八九一年初頭に大学で行った講義を基に、翌年立て続けに雑誌掲載した論考を、死没の前年、九三年に（結果的に）最後の新著として出版した『プラトンとプラトン哲学』が、全体としては『国家』論として構想されていたことにも納得がいく。とはいえ、「結語」は形式の準拠に関わらず内容の逸脱によって大学内で集中砲火を浴びることとなり、また舟川が「ほとんど彼の自伝の断片として読める」としたほどヴィクトリア朝古典教育と重なるところの大きい、スパルタの「愛と服従」による若者教育の細部を描写した『プラトンとプラトン哲学』第八章「ラケダイモン」は、これを視察し終えたアテナイの学生の口を借りて、こんな苦痛でしかない無駄な鍛錬を続けるのはなぜか、という問いで締めくくられているのだが（30-5）。

これに対して、本書第二章「ギリシア神話論と十九世紀古典学の新方向」と第三章「彫刻は倫理的観念の伝達者たりうるか」は、ペイター没後に友人チャールズ・ランスロット・シャドウェルが編纂出版した『ギリシア研究』のそれぞれ前半（デメテル／ペルセポネとディオニュソスの神話）と後半（彫刻論）を主な主題として取り上げている。『プラトンとプラトン哲学』が講義に基づく著作であり、大学組織との関連で考察されたのから一転して、『ギリシア研究』はバーミンガム・アンド・ミッドランド・インスティテュート（BMI）での講演に基づいており、大学外の知識層の形成という、より広い文脈において読み解かれていく。一八五四年創立のBMI自体が、ヴィクトリア朝期における中流階級・労働者階級向け成人教育の興隆を物語る代表的な組織の一つとして文化史的意義が高い。また講演録の主な発表媒体となった『フォートナイトリー・リヴュー』を中心に、当時の定期刊行物の勢力図と編集者人脈が、要領よく整理されており、この箇所だけでも有益と思う読者は少なくないだろう。「あとがき」（未完の小説『ガストン・ド・ラトゥール』第五章から借りて「判断の留保」と題されている）でも、出版業界をめぐる動向は引き続き取り上げられており、著者がこのテーマを重要と判断していることがよく解る。

このように地ならしを済ませたところで、ペイター流の神話理解と彫刻

論をめぐる議論が続くのだが、紙数も限られており、下手な要約は止めて、印象的な一節をそれぞれ引用して、広くヴィクトリア朝文化に関心ある方々に繰り返し本書を勧めるにとどめたい。

「ペイターのギリシア神話論は、ギリシアの宗教や文化に関する旧世代の既成概念を覆す体のものである一方で、同時代の思想地図の中で新たに勢力を拡大しつつあった進歩主義や近代主義の傾向からも逸脱するものとなった」(65-6)。

(「ヴィンケルマン」で語られる「自由」とは)「正しいと仮定された一つの観念を盾に、この世界(特に近代世界)が提供する他のあらゆる経験――たとえそれが悪の経験であったとしても――の可能性を閉ざすことを潔しとしない態度。ミルトンが『アレオパジティカ』で『実世界で試されず、実行もされないで[悪から]逃避し、修道院に籠もっているような美徳を私は評価することができない』と言ったのと同様に、ペイターも藝術を、世界から隔絶し修道院的に完結した閉鎖空間――ヴィンケルマンが生きた穢れなきフォルムの世界――で行われる営みと見なすことはしなかったのだ」(112)

さて、より狭いペイター批評の文脈においても、本書はきわめて論争的な主張を少なくとも二つ含んでいる(英訳されたらどうなるだろう、と想像してみる)。まず第一章の冒頭で、ペイターの同性愛スキャンダルを広く喧伝したビリー・アンドルー・インマンの論文(とその定説化に一役買ったリンダ・ダウリング)について、その所論の肝心なところを推論と飛躍が埋めていると指摘した上で、近年のペイター批評がセクシュアリティーの問題に偏りがちで、ややもすると(ケイト・ヘクストを引きつつ)「ホモエロティックな志向を過大に読み込もうとする」傾向や、参照されるプラトンのテクストが『国家』ではなく『饗宴』と『パイドロス』ばかりである現状に、疑問を呈している点である。

もう一点が、「ジョルジョーネ派」の名高い「すべての芸術は常に音楽の状態に憧れる」という命題について、ペイターが必ずしもそれを芸術が最終的に達成すべき理想状態と見てはいなかったのではないかという指摘である。『フォートナイトリー』一八七七年十月号に掲載されたこの論文は、同時期に発表された一連のギリシア彫刻論と並べて読まれてしかるべきで

あろう。文脈を広く読み取れば、「音楽によって到達される完全状態とは、『内容』の欠如あるいは希薄化によって得られる消極的な意味での完全状態――中身がないために矛盾も起こらない、思考が未発達であるために感覚的印象と知性の間に齟齬が生じ得ない状態」(96) に過ぎない。一方ペイターは、クニドスのデメテル像を典型とする最も発達した段階のギリシア彫刻に「近代人にも働きかける倫理的な効果」、つまり単なる視覚情報を超えてデメテル神話が喚起する「苦難とその末にある和解が織りなす倫理的意味」を求めていた。そうした複雑な精神の様態の表現をペイターが求めていたという主張の延長上に、先に引用した一節も置かれているわけである。これらの問いかけにペイター研究者らがどう応えるかを見守りたい。

最後に本書における舟川の方法論として指摘しておきたいのは、ペイターが題材に託して〈自分語り〉をしていると思しい箇所に対する鋭い反応と、テクストに対する微細な違和感から新しい解釈を導き出して見せる手法である。後者は通常、散文より詩を読解する際に用いられる方法と思われるが、ペイターの詩的散文がそうさせたというより、舟川が (大学の担当授業などで) 詩を読み続けることで培ってきた感覚ではないかと推測した。

決して長いとは言えない生涯の間に、ギリシア、ローマ (『享楽主義者マリウス』)、ルネサンス、十六世紀フランス (『ガストン・ド・ラトゥール』)、さらには同時代に到るまで、ヨーロッパ精神史全体を覆いつくすかのように語り続けたペイターの知的営為が、本書を通じて、以前にも増して高くそびえ立つように思われた。大著と呼ぶ所以である。